

地域と学ぶ

山形大地域教育文化学部

山形大地域教育文化学部は、古里の活性化に貢献する人材の育成を掲げ、地域密着型の教育活動を展開している。テーマは東日本大震災からの復興、文化芸術の発展など多岐にわたる。地域という「教室」で何を実践し、連携する地元住民と学生はどのように関わっているのか。同学部の教員に紹介してもらおう。

東日本大震災による被災地支援として日本ユニセフ協会、竹中工務店(大阪市)と協働で子どもと築く復興へのまちづくり活動を進めている。子どもたちを未来

教育

都市計画・子ども環境学

佐藤慎也教授

▽1965年生まれ、岩手県出身。山形大着任は2005年。



国連防災世界会議パブリックフォーラムで展示した模型「未来の七郷まちづくり」
＝3月、仙台市

児童主役に古里復興



「まちづくり」を12年から七郷小(6年生)で実施しており、3月の国連防災世界会議の際にも作品展示と発表を行った。授業を担当した

地域教育文化学部4年佐藤春花さんはかつて、これら同様の取り組み「仙台子どものまち」に参加した経験を踏まえ、「さまざまな世代の人が子どもたちと関わりながら活動し、交流を深めている。子どもが笑って遊び回れる環境の復興、ひいては人とのつながりの復興となる活動として取り組んでいきたい」と抱負を語ってくれた。子どもたちが成長し、学生として支援活動に加わり、市民としてまた子どもを育てていく。

のまちづくりの主役として捉え直し、地域を舞台にした遊びや学びを通じ、子どもたちの学びの時間を「まちづくり学習」を提供してきている。子どもたちは、里づくりに生かすものである。具体的な活動として、外遊びとして岩手県大槌町の「里山まるごとプレパーク」、今年で4年目を迎える「子どものまち・いしのまき」のほか、台市では、「未来の七郷ま

鳥崎英治教諭は「水田が広がる七郷地区は現在、復興サポートを今後も展開できればと考えている。」

11月1回掲載します